

8 北関東の3県では.....

群馬、栃木、茨城の3県のうち、群馬は数園、栃木、茨城では10園余りが、漢字教育を実践しています。栃木のすぎのこ幼稚園が昭和45年開始と最も古く、その他は、最近の7、8年以内という園が多いのですが、いずれの園も大変熱心に取り組んでいて、そのため、教員の研修や研究活動が盛んなことも特筆できることだと思います。それでは順に、その歴史、子どもたちの様子などを見て

園児の“精神的成長”にも意を注ぐ群馬の江木幼稚園

群馬県では、その代表として前橋市の江木幼稚園のケースを取り上げてみます。昭和33年に創立され、石井方式は54年4月から採用、漢字絵本やフラッシュカードを使用するほか、ちょっとユニークな試みもしています。それは園児たちが覚えた漢字を、たて9センチよこ6センチのカードに毛筆で書き、それをコピーして全園児に渡し、家庭に持ち帰って、そこでもまた楽しめるようにしているというものです。

子どもたちにとって“反復”がいかに重要であるか、石井先生が常に説いていることですが、幼稚園で一日数十分漢字で遊んで「ハイ終わり」では、その反復がなかなかできにくいこととなります。この意味でも、園と家庭とが協力し合う方式は、大変すぐれていると思われるのです。第一、子どもも親も、一緒になって漢字で遊ぶことは、単に漢字を覚えるというばかりではなく、親子のコミュニケーションを図る上でも意義のあることといわなければなりません。

さて、江木幼稚園では、どうして石井方式を導入するようになったのか、その前後のいきさつはどんなものがあったのか、あるいは子どもたちの様子などについて、園長の太田きみ子先生はこんな風に説明しています。

「特色ある幼稚園として、いったいどんなことを取り入れようかと考え、また、幼児が卒園するまでに、どれほど努力しても、なにか精神面での成長に“あと一步もの足りない”と感じながら園児を送り出していたのです。何年もこのようなことに悩んでいましたが、いつでしたか、ある大学の先生のお話をうかがっている時、幼稚園で漢字を数えているところがあるとおっしゃったのです。その後、石井先生の講演をお聞きする機会があり、そこで私の考えが決まりました。初めには、父兄に、石井先生から直接お話をしていただき、そのあと、父兄全員にアンケートを取ったのです。集計しますと、漢字学習に賛成の人が90パーセントを超えていました。それでいよいよ実施に踏み切ったわけです。

初めのころは、教師の側もどう指導したら良いのか、あるいは子どもたちは本当に覚えたかどうかと、不安がありました。結果は、子どもたちがやたら泣くことがなくなり、気持ちが落ち着いて来ましたし、以前にくらべて、目が輝くようになりました。全く、子どもたちは、乾いた地面に散水したように、すばやく漢字を吸収していくのには驚きました」

子どもたちの良い意味の変化はこれらだけではありません。身の回りの整理整頓がキチンとできるようになり、ものごとに集中力が出て来たそうです。あるいは漢字で歌詞を示すと、歌をすぐ覚え、県名、

都市名なども多く覚えて視野が広がったといえます。また、家庭でむずかしい漢字をスラスラと読むために、兄弟たちがあ然としてうらやましがった、などの報告が父兄から相次いだそうです。

江木幼稚園はまた、先生方の研究熱心なことでも知られています。教える立場、教えられる立場から、もっといろいろ工夫する余地があるのではないかと、あるいは自らの行なった学習における効果はどんなものがあるのか、など漢字についての研修を、太田先生がリーダーとなって毎日行なっているというのです。

このほか、小学校一～三年に在学する卒園生のうち、とくに希望する園児には、週に2回、漢字の指導を行なってもいます。毎年希望者が数人あり、現在は約15人が元気に通って来ているそうです。

こうして、いまでは「漢字学習を頑張っていて欲しい」という親の声がよく聞かれるといえますから、漢字学習は完全に定着したといえるわけです。

栃木ではすぎのこ幼稚園が“先導者”役を

昭和46年の10月2日付「朝日新聞」に、漢字教育を始めて一年余り経過した那須郡西那須町のすぎのこ幼稚園の記事が載りました。少し引用してみましょう。「鳩、梨、蝶“読メチャッタ”1年に二～三百字遊びながら自然に覚える」という見出しがついています。

「『鳩』『梨』『蝶』……小学校低学年でもちょっと読めそうにない漢字だが、三、四歳の幼稚園児たちが声を合わせてスラスラ読む那須郡西那須町扇町、すぎのこ幼稚園での授業風景。同園は昨年秋から、幼稚園では珍しい漢字教育を取入れで効果をあげている。

(中略)2年保育、四歳児の教室。先生が示す2枚の漢字カードに、園児たちは勢いよく手をあげる。名を呼ばれて坊やがみんなの前に出て、まずその2つの漢字を読み、その場で漢字を組合わせてお話を作る。

『森』にいる『牛』さんのお話。『雨』に降られた『毛虫』さんのお話。園児たちは目を輝かせてお話に聞入り、終わるとかわいい手で一斉に拍手する。(中略)

同園では、とくに漢字教育のための時間はない。遊戯、歌など幼稚園教育のカリキュラムの中に、漢字教育が取り入れられている。

『漢字を教えこむのではなく、関心、興味を持たせること、身近に漢字をおいて、遊びの中で知らず知らずのうちに覚えさせるのがねらい』と戸田園長はいう。(以下略)」

こういう調子で、園児たちが1年間に二百から三百の漢字を覚えること、「家で新聞の見出しを読むようになってピ。クリ」「ウチの子はテレビの番組や相撲取りの名前を読む」「魚ヘンの字を幼稚園で教わって帰り、辞書をめくって他の魚ヘンの字をさがす子もいる」といった子どもたちの織り成すエピソードの紹介、そして、「漢字を習いはじめてから、態度にも落ち着きが出て、言うこともしっかりしてきた」「物の性質のとらえ方がうまくなり、自分自身に自信を持つようになった」など、子どもたちの著しい“成長”ぶりもあわせて載せていました。12年も前に、すでにこれだけの成果を上げていたことがよくわかるでしょう。

ところで、園長の戸田白鳳先生は、このころ、県立のある女子高校の、国語教師を務めていました。やはり、年々低下する生徒の国語力に頭を痛めていたといい、これなども、幼稚園で漢字学習を取り入れ

る勤機となったそうです。

当初の父兄の反発など、もちろん今では、過去の“語り草”とでもいうべきものなのですが、県下の他園ではなかなか石井方式の採用に踏み切れずにいるそうです。戸田先生は「栃木は保守的ですからね」といっているのですが、たとえば、いろいろな会合に出ても、県の行政担当者らが幼稚園の関係者に、「まさか(漢字学習を)やっていないでしょうね」とクギをさすことが今でもあるとのこと。従って、幼稚園の園長や指導者クラスもつい及び腰になってしまう傾向があるということです。公立を含め、県下に約 220 近くの幼稚園が存在していますが、なかなか壁は厚いといったところでしょう。

このほかにも、那須郡には那須幼稚園、黒磯市には黒磯、黒磯第二、宇都宮市では陽の丘第二、あつみの各幼稚園、さらに足利市に本城保育園 などが栃木県内で、熱心に漢字学習に取り組む実践園として知られています。

保育園の実践園が多い茨城県

茨城県内の実践園の特色は、その多くが保育園であることです。茨城でいちばん早い実践園が那珂湊市の堀川保育園であり、その園長の堀川秀雄先生の懸命な普及活動のたまものです。これは、全国的にみても、珍しい傾向といえるでしょう。

さて、その堀川保育園 実践を始めたのは実は昭和 53 年で、5 年ほど前のことです。早くから、その熱心な漢字学習ぶりは、注目的となり、今では茨城県内において指導的役割を果たしているわけです。

園児数 150 名。石井方式採用後、それまではほとんど公立幼稚園へ転入していった年長児が、そのまま保育園に残る傾向が強くなって来たといえます。ちなみに昭和 58 年度の場合、65 名の五歳児のうち 40 名が保育園に残り、漢字学習をつづけています。これなども、一つの理由として、漢字教育の効果に父兄が気づいて、引き続き子どもを通わせようとしたためと見ることができます。

熱心な指導者である堀川先生と石井方式との出会いは、石井先生の著書『石井式漢字教育革命』を読んだことに始まったといえます。堀川先生はその石井先生の考えに感激し、さっそく園に招いて公開保育と講演をしてもらったそうです。そして、園での実践を開始したものの、当初はどうも先生方の側に抵抗感がありましたが、3 年目あたりから、ようやく軌道に乗ったようです。その辺の“事始め”の苦心について、堀川先生はこういっています。

「最初は教師に対して実践園の見学をさせる。第 1 回では納得できなく足踏みの状態。2 回目によりやく心を開き、実施しようとする足を一步前に出す。3 回目からはためらうことなく前進する」と。

教え方の原則は“即時即物”で。たとえば、教室に螢が飛び込んできたら「螢」を、芋掘りに行けば、「芋、葉、茎、蔓、根」を示す、という具合に、先生たちがその時々状況に応じて漢字を提示する教授法を取っています。

ところで、堀川先生は、数年前に、「わが園の漢字教育」と題した冊子をつくりました。これには、保育園から毎月出ている「園便り」や「組便り」に、漢字学習について堀川先生が書いた文の抜すいをまとめて載せてありますが、その最後に「漢字教育についてのアンケート」

が掲載されています。父兄の関心、期待などが良く表われていますので、少し例示してみましょ。答えているのは、四歳児の父兄。

まず、石井先生の漢字教育の話。「した方がよい」49名、「少しはよい」28名、「しなくてよい」ゼロ、解答ナシ8名。保育園での漢字教育について、「ぜひ積極的に」48名、「まずまずよい」20名、「しなくてもよい」ゼロ、解答ナシ7名。家庭で漢字を教えているかという問いに対しては、「毎日している」6名、「1~2日おきぐらいに」12名、「3~4日おきぐらいに」7名、「たまにする」39名、「全然しない」8名、解答ナシ4名。「お子さんは漢字を喜んで覚える」23名、「まずまず覚える」44名、「覚えぬい」5名、解答ナシ4名、家庭でお子さんに「この字なあに」と聞かれるかどうかについては、「よく聞かれる」32名、「たまに聞かれる」36名、「全然聞かれない」3名、解答ナシ3名.....といった具合に続きます。

この結果を見ますと、子どもたちの熱心なさまがよくわかりますし、父兄の保育園への期待感の高いことも理解できます。が、どうも子どもたちの方が、父兄の考えている以上に、漢字学習を喜々としてやっているようで、父兄としてはチョッピリ認識不足といえるのかも知れません。

さて、堀川先生の石井方式の普及にかける情熱は、いまもすこしも変わりません。茨城県下の実践園はすでに「もう20園を超えている」といいます。ただし、公立の幼稚園、保育園はなかなか腰を上げようとしぬいらしく、少々冷淡なところもあるといささか残念そうです。また、近隣の小学校でも、先生方は「心では賛成していても、口に出して賛成はなかなかしてくれない」ということですが、父兄の方は「正直で、

ほとんど疑問を持つ人はいぬいし、積極的に賛意を表わしている」と、心強い応援の声に勇気づけられると堀川先生は述べています。

ではここで、堀川保育園以外の茨城県内の主な実践園を見てみましょ。

勝田市では市毛フレンド保育園が実践中。ここは昭和54年の開園と同時に石井方式を採用しました。園児数250名。漢字学習を始めてから、他の幼稚園へ移る子どもがほとんどいなくなり、逆に幼稚園から転入してくる場合もあるといいますから、すでに石井方式は根づいたといえるでしょう。

最初のころは、漢字絵本とフラッシュカードだけで漢字学習を行なっていました。が、3年目から諺カルタ、そして現在では百人一首も取り入れています。

「長い時間預かっているお子さんに、遊びだけでなく、教育面をと考え石井方式を取り入れています」と、磯崎千尋園長の言葉です。

堀川保育園とともに那珂湊市には平磯保育園があります。堀川幼稚園に遅れること1年で、石井方式を取り入れましたが、ここでも幼稚園から転入してくる子どもが目につくそうです。

筑波郡大穂町で実践しているのが、吉沼保育園。55年から漢字教育をはじめ、年々園児数が増えてきて、遂に幼稚園も開設して(吉沼幼稚園)、それに対応しているとのこと。す。「父兄も子どもの成長に必要であると全面的に賛同し喜んでいぬい」と星野茂丸園長は語っています。